

## 今日が始まり

井内 昇

大学を卒業した時が30才。それから35回の春秋が過ぎてゆき、お茶大を退官する日がきた。社会人生活35年目といえば普通なら57～58才くらいであるから、私の場合、仕事に関して言えばまだ燃焼し切っていない、という想いも無くはない。しかし、肉体年齢は正直なもので、体力の衰えも感じるし、自分では気が付かなくても周りに老害をまき散らしていたことは間違い無く、舞台の幕を引くよい潮時といえる。お茶大で過ごした17年半は、この社会人としての35年の丁度半分に当たるが、充実した日々を送らせて頂けたのは、ひとえに学生・卒業生、そして教室の先輩・同僚すべての方々のお陰である。

ところで、大学、とくに国の財政で賄われている国立大学は、社会の役に立つ人材を育て送り出す義務があるが、お茶大地理学科はこの社会的要請に十分応えてきたと誇りを持って言える。最近、某私立大学教育研究所機関誌の「ジェンダー・セックス特集」号の座談会記事に、若い女性研究所員の次の趣旨の発言が載っていた。『自分は他大学からお茶大大学院に行ったが、先生自身に研究者を育てるという意識が無く、ひどい失望を味わった……云々』しかし、私の知る限りではこういうケースは無いと思っている。1991年6月、来日したアメリカ地理学会会長S. ハンソン女史を迎えて、お茶大地理学科卒業生との懇談会が開かれた（本誌33号記事参照）。この席で紹介されたデータ（1989年）によれば、非常勤も含む全国大学地理学科女性教員28名のうち10名が本学地理学科出身者であり、少なくとも本地理学科に関する限り、女性研究者を育てるという責務は果たしており、上述のような批判を受けるいわれは毛頭無い。とくに、1976年に新設された博士課程へは、すでに10名以上が進学し、その中からPhDも含め学位取得者3名、大学・短大専任教員6名が生まれている。この実績からすれば、今後日本の女性地理学者養成の中心的存在であり続けるものと期待される。

一方、卒業生の大半が学部を了えて社会に出るが、卒業後の進路をみると、とくに1986年の雇用機会均等法施行後は民間企業への進出がめざましく、採用後は内外のマーケティング、地域開発関連をはじめ、直接、間接に地理学を生かせる部門に配属される例が多い。その半面、従来女高師の伝統を受け継ぎ主力であった教職関係は、近年就職事情が厳しいが、限られた志望者は教育への明確な信念と目標を持ち、職場での評価は高い。このように、近年卒業者の進路は多様化しているが、どの途へ進んでも持てる力を発揮して社会に貢献していることは頼もしい限りである。この優れた学生達に在学中どこまでお役に立てたか、顧みれば内心忸怩たるものがある。それにも拘らず、毎年多くの学生を卒論ゼミに迎え、学生達は自分の力で立派な論文をまとめ社会に巣立って行ったし、学期末にいつも悔恨の情にかられる拙い講義を、一生懸命聞いてくれた沢山の学生が居た。今振り返って思い出すのは、熱心に学んでくれた学生ひとりひとりの顔で、この素晴らしい地理学科に籍を置いた幸せに感謝している。

21世紀を目前に控え、地理学はさらなる充実を求められている。お茶大地理学科とお茶の水地理学会の一層の発展ならびに会員の皆様のご多幸を切望すると共に、私も退官を機会にあらためて「今日が始まり」と肝に銘じ、及ばずながら会員の一人として学会のお役に立ちたいと思っている。